



教皇様の叢

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1994 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町1-2-6 TEL 0797-31-3452・FAX 0797-31-3448

家庭を守ろう

1 聖家族の祝日(12月26日)

に、教会は国連の提唱に対応して「家族年」の始まりを宣言しました。家族年開始の記念式典はナザレトで教皇特使によるミサと共に始まりました。まことに、家族年は何よりもまず祈りの年、主の恩寵と祝福を全世界の家庭のために祈り求める年でなければなりません。

2 まず最初はマテオの福音書の生後間もなく聖家族にふりかかった危難についてです。一家を脅かしたいわれのない暴力は、他の多くの家庭を壊し、幼子たちの死をもたらしました。

神の御子と同年齢の子供たちが経験したこの恐ろしい事件を思い返しつつ、教会は内から、あるいは外から脅かされている全ての家族のために祈らねばならないと感じています。特に両親たち、ルカの福音書でその大きな責任を指摘されている両親たちのために。実に、神は御子をマリアに委ね、二人をヨセフに委ねられました。全ての母親、父親のために、彼らが使命を忠実に果し、子供たちを配慮に任せられた神の信頼に価することを証明できるように、祈り続けねばなりません。次に、召命を育てる場としての

家庭についてです。エルサレムの神殿で学者たちと話すイエズスに不安にかられて探していたマリアとヨセフに言われた言葉にそれを見る事ができます。「私が父の家にいるはずだと知らなかったのですか。(父のことがらに従事すべきことを知らなかったのですか。)(ルカ2・49) 一九八五年の世界青年の年に、世界の若者たちに当てた書簡で私は、このような生涯計画を若いうちに作り上げるよう努めることの大切さを訴えました。十二歳にして、イエズスは完全に自らを御父のことに捧げました。私たちも各自が「御父のことがらとは何だろう?」…生涯を通してなすべきことは何だろうと、自問するよう求められています。

3 家庭における召命のもう一つのテーマは使徒の勧め、たとえばエフエソヤコサイへの手紙に見られます。使徒たち、後には教会の教父たちは、家庭を「家庭教会」とみなしました。教皇パウロ六世もこの偉大な伝統のつとめ、ナザレトと聖家族の模範についての説教の中で、ナザレトは「家族生活の何たるかについて、その愛の交わり、真実で簡素な美しさ、神聖で不滅の性質について」教えてくれる、と言われました。(Insegnamenti di Paolo VI, II [1964], p.25)

このように教会は、初代から家族への手紙をつづってきたのです。(…)ナザレトの聖家族は永遠に私たちを駆り立て、「家庭教会」と全ての人間家族の秘義を深めるよう促しています。それは家庭のために、家庭と共に祈り、その喜びと希望、不安と悩みを分かち合う理由でもあります。

キリスト者の家庭生活は、日々神に捧げられる聖なる供え物として、聖体のパンとぶどう酒に一致させるべきものです。「家族年」が家庭についてのカタケージスのための良き機会となります。

4 事実、家庭の中で経験する

ことは、キリスト信者の生活において日々神に捧げられる聖なる供え物、神にのみせられる霊のいけにえ(1ペトロ2・5、ローマ12・1参照)としなければなりません。神殿におけるイエズスの奉獻の場面にもそれが見られます。「世の光」(ヨハネ8・12)イエズスは、また「逆らいのしるし」(ルカ2・34)でもあ

5 ナザレトの聖家族は、全ての家庭の有する使命をさらに深く理解させたいと願っています。家庭の尊厳と聖性はキリストに由来するのです。クリスマスに神は人間と出会い、分かちえない形で人間をご自身に結び付けられました。この感嘆すべき一致は、また家族の一致をも含みます。この現実を見つめる教会は「偉大な奥義」(エフエソ5・32参照)を前にした時のように、頭を下げます。家庭の召されている交わりの体験のうちに、将来の三位一体の交わりの反映を見、キリスト信者の婚姻は単なる自然の現実のみならず、キリストと教会との婚姻の秘跡でもあることを悟ります。これこそが家庭と結婚の持つ至高の尊厳である、と第二バチカン公会議は教えます。神のもともとのすばらしい計画を知り、実行する家庭、キリストの示す道を進む家庭は、幸いです。(九三・十二・二九)

り、全ての家庭からのこうした捧げ物を、聖体のパンとぶどう酒のように受けることを望んでおられます。主はこれら人間の喜びと希望、家庭生活につきものの避けがたい苦悩や不安を、全実体変化のためのパンとぶどう酒に一致させ、それらをご自分の御体と御血の秘義の中に置きたいとお望みです。そして聖体拝領でのこの御体と御血を、個々の人間だけでなく全ての家庭のための霊的エネルギーの源として与えてくださいます。

福音宣教の 基盤は聖体

★ 「神なる主がこの40年の間おまえたちに荒野を歩かせたその旅を思い出せ。」(第二法の書8・2)

思い出して下さい。主の道は命への道です。カファルナウムの近くでパンを増やす奇跡をなさった時、人々はキリストを王にしようとしましたが、主は言われました。「私は生きるパンである」；いずれ消えてしまう王ではなく、天から下った生きるパンであり、「これを食べる者は永遠に生きる。私の与えるパンは、世の命のために渡される私の肉である。」(ヨハネ6・51)

ナザレトのイエズスは、神が小羊の血を通してエジプトから導き出されたご自分の民の記憶に訴えかけています。砂漠を行く間、飢えた民に神は天からマンナを降らせました。「あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが死んだ。」(同6・49) カファルナウムの近くでイエズスの話を聞いた人は皆、奇跡の食物マンナとそれを食べた人々が死んだことを思い起したでしょう。荒野で先祖たちはマンナで飢えをしのいだのです。彼らは人間の日々の糧となる地上のパンとしてマンナを食べましたが、その食物は不死をもたら

しませんでしたし、誰もそんなことは期待していませんでした。

★ キリストは続けて言われました。「私の与えるパンは、世の命のために渡される私の肉である。」多くの人のとって、この宣言を理解し、受け入れるのは容易ならぬことと言え、それは明らかで疑問の余地がありません。この言葉は間もなく最後の晩餐において、エルサレムでの過越祭前夜に成就します。高間でキリストは、預言されたとおりに全てを行われました。キリストは使徒たちにパンとぶどう酒を与えて言われます。「これは私の体である」「これは新しい永遠の契約となる私の血である。」こうして主は教会の新しい記念となる角の親石を置かれました。「私の記念としてこれを行え。」(聖体に対する折り参照、Iコリント11・24、25参照)

教会に残されたこの記念は、単なる思い出ではありません。それはキリストの絶えざる現存の秘跡です。繰り返すたびにキリストのいけにえが現存します。「私たちのために渡される御体」と全世界の「罪のために流される御血」が、それです。聖体の秘跡は、キリストの死を

現存させると同時に、命をも与えます。物質的なパンに養われる日々の生命ではなく、永遠の生命を。「私の肉を食べ私の血を飲む者は永遠の命を有し、終りの日にその人々を私は復活させる。」(ヨハネ6・54)

それを聞いた人々は驚きました。「この人はどのようにして自分の肉を私たちに食べさせるのだろうか?」(同6・52) 高間では使徒たちはそんなことを尋ねず、ただ取って食べ、飲んだのです。キリストはどのようにして永遠の命を下さるのでしょう。カファルナウムで、すでにその答えは出されてきました。「私の肉を食べ私の血を飲む者は私に宿り、私もまたその者のうちに宿る。」(6・56) さらに「生きてまします御父が私を遣わし、その御父によって私が生きてるように、私を食べる者も私によって生きる。」(6・57)

最後の晩餐の翌日、イエズスは十字架上で亡くなりました。しかし三日目に復活し、もはや死の支配は及ばなくなりました。主にとどまる者は、その命を共にするのです。主の肉を食べ、血を飲む者は主によって生き、御父と一つの命である御子の命を共有します。★ 今聞いた福音書の言葉は、直接に私たち一人ひとり、私たちの家族、教会共同体、そして社会全体に語りかけています。イエズスにとどまる人は誰でも、死の支配の及ばぬ命を共有し

ます。私たちはそのことをミサの中で宣言します。(…)

キリストのみが永遠の命の生きるパンです。キリストはその言葉と御体・御血というすばらしい贈り物を通じて、全人類のための生きるパンとなつてくださいます。第二バチカン公会議によれば、「聖体祭儀によって行われる主と人々との契約の更新は、信者をキリストの迫る愛に駆り立てて燃やすのである。」(典礼憲章10番)

「教会は秘跡によって生きています。教会はこの秘跡の豊かさによって生き、その驚くべき本質と意味は、古代から今日まで教会の教導職によって、しばしば説明されました。」(「人間の贖い主」20番) こうして聖体は、真の神の民としての教会を築き、過越のいけにえを基に彼らを絶えず生れ変らせています。その働きは、皆さん自身の教会の中でも続いているのです。(…)

★ キリスト信者の使命は、いけにえの秘跡・交わりの秘跡・現存の秘跡である聖体を源とします。それゆえ、深く真摯な刷新の望みに燃える皆さんの教区で

は「聖体祭儀の中に教会の霊的富のすべて、すなわちキリスト自身が含まれている」(司祭の役割と生活に関する教令、5番) こと、司牧計画は聖体祭儀を全ての中心に据えるべきであることを確信しつつ、みことばの典礼・聖体の典礼運動を進めてこられました。

皆さんの努力が、命を与える聖霊の働きによって導かれ、支えられ、何よりも社会で起りつつある変化をよく認識し、日曜日の聖体祭儀が皆さんの霊的成長のためにいかに大切であるかを気づかせてくれるよう、心から望みます。それは必ずや、立ちほだかる障害を取り除き、教会の典礼生活全体へのより深い参加を促すことでしょう。(…)

★ 兄弟姉妹の皆さん、どうかキリストに心を開いてください。その御体と御血の贈り物を受け取ってください。「私を食べる者は私によって生きる」と保証して下さったのですから。

★ キリストによって養われることは、折ること、その言葉を聞くこと、聖櫃のキリストを礼拝することです。そこには当然、キリストの教えを實行すること、実際に隣人を愛すること、被造物を尊重することが含まれています。それは、測り知れないキリストのいけにえの意義を知り、常に心を込めてその一端を担うことでもあります。これらのこと全てが、信者各人の信仰の旅路においてどれほど重

【新刊案内】

世の光イエズス・キリスト「カトリック教会のカテキズム」要約Q&A……定価一三〇〇円

千三〇〇円

説教・講話・書簡等の抄訳

聖座の認可を受け出版のはこびとなった「カトリック教会のカテキズム」をもとに書き下ろされた、問答形式でわかりやすい要理書です。従来の要理書では触れられることの少なかった現代的な問題(性倫理など)に明確な指針を示す、実践的なカテキズム。本邦初訳。お申し込みは精道教育促進協会まで。

要不可欠であることか! また、教会の使命そのものを寛大に果す上で、どれほど必要となることか!

現代人が見当違いの方向で懸命に、しかし無益に捜し求めている真の喜びは、ただ主の死と復活においてのみ手に入るのです。そのことを一刻も早く悟らねばなりません。

★「おほえよ、主なる神がどのように旅路を導いてこられたかを。」私たちのうちにある命に立ち戻りましょう。唯一無二の方法で、キリストの死と復活の真理へ。私たちの命と復活の源がそこにあります。神のもとでの永遠の命への希望はそこに不滅の礎を置き、約束されているのです。

私たちの過越・キリストは、私たちのため、いけにえとなられた。アレルヤ! 主は私たちのためにご自分を捧げ、この世で巡礼の旅を続ける私たちの糧となつて、真理と愛のうちに成長することができるといってくださった。こうして聖体は兄弟的な交わりの宴、神的不死への道、新たな福音宣教と希望のメッセージの源となります。聖体は、この過ぎ行く世界のためだけに私たちを変え、聖化し、準備のできた者とする愛の泉です。人はパンだけではなく、神の口から出る全ての言葉によって生きる。そしてこの永遠の秘跡の言葉こそ、聖体なのです。アーメン。

(五・一)

教皇様の動き(九四・三)復活祭

●3・18 教皇庁文化評議会の総会でのお話。「文化評議会設立のねらいは、福音のメッセージと多種多様な文化との絶え間ない新しい出会いを、全教会のために促進することです。」

●3・23 水曜日的一般謁見で、「真理・愛・平和の霊を人々に植えつけるといふ教会の普遍的使命」に一致した、新しい種々の信徒組織に感謝を表された。「信徒は教会の使命を促進することができ、多種多様な信徒の組織や活動は、教会を建てる聖霊の賜と呼びかけの豊かさを反映している。」

●3・24 家庭評議会の総会で、「妻、母として女性の果す役割は社会的にも優れた価値を持ち、尊重されるべきです」と話された。

●4・3 復活祭のミサの後、聖ペトロ大聖堂正面バルコニーから復活祭のメッセージを読み上げ、広場を埋めた大群衆に復活したキリストの喜びと平和を願い、ローマ全市と世界に祝福を送られた。

●3・19 全世界の元首と国連事務局長宛てに自筆サイン入りの書簡をお送りになった。今年9月エジプトのカイロで開かれる人口問題国際会議に関するもので、「社会が成り立つか否かに関わる」倫理的な局面に当局者の注意を集めたいと願われたのである。「会議

文書の最終案を読んで驚きました。実に憂慮すべきことです。」

●3・27 棕櫚の日曜日、アメリカ・デンバーから届いた「巡礼の十字架」が来年の世界若者の日大会の開催地フィリピン・マニラの若者たちに渡された。

●4・6 一般謁見でバチカン広場の群衆の前に、「生れる前の生命が組織的に取り去られている現状では、未来はおぼつかない」と述べ、国際家族年が「家族に反する年」となる懸念を強調された。

信仰の神秘



「私は生きるパンである。」(ヨハネ6・51) 荒れ野で使徒たちはイエズスに言いました。「人々を帰らせてください。」(ルカ9・12) 人々は神の国についての主のお話を聞きながらつき従ってきたのですが、日も暮れて食事の時間になっていました。人々は黙って何かを待っていました。

昔、荒れ野で食物がなくなつた時、イスラエルの子らはモーセに反抗しましたが、天から毎朝宿営に降ってくる食物を得て、それをマンナと呼びました。こうしてエ

ジプトを出た民は、奴隷の地から約束の土地への旅を続けたのです。さて、イエズスは使徒たちに「あなたがたが食物をやれ」(ルカ9・13)と言われますが、彼らはどうすることもできません。そこでキリストはパンを増やされます。主はそこにあつたわずかのパンを祝福し、割つて弟子たちに与え、彼らがそれを人々に分けました。「皆はそれを充分に食べた。」

荒れ野でパンを増やしたのは、マンナの場合と同様、預言と言えます。人々は、食物を与え飢えを癒すイエズスの力を見て、つき従いました。イエズスを王にしようとして考えました。メシアの支配とその勝利の日を歌つたのはダビドの詩篇です。「主権はあなたのもの、あなたの生まれた日から、聖なる山の上で。」(詩篇103・3) 同じ詩篇の中で、王なるメシアは祭司と呼ばれています。「あなたは永遠の祭司、メルキセデクの位に等しい。」(同4)

メルキセデクは王であり、同時にいと高き神の祭司でした。旧約の祭司たちとは対照的に、彼は犠牲の動物の血よりもパンとぶどう酒を神に捧げました。

従つて、パンの奇跡は預言的メッセージとなります。キリストは、メルキセデクの供え物に含ま

れる預言を成就させるのはご自身であることを知っておられました。新しい永遠の契約の大祭司として、イエズスは自らの血による世の贖いを果たした後に永遠の聖所に入ることでしよう。高間に集う使徒たちに向かい、イエズスは実質上、前回と同じことを命じます。「あなたがたが食べ物をやれ。」

「私の記念としてこれを行え!」(…) 身体の飢え、死に至る飢えは恐ろしいものですが、魂の飢え、精神の飢えというものもあるのです。魂の死は別次元のもので、永遠の次元から見た死、「第二の死」(黙示録20・14)です。パンを増やし、飢えを鎮めたキリストは、もう一つのパンの存在を示す、預言的しるしをお与えに

不変の教え

教会はペトロの上に 立てられた 教会シリーズ 20

なりました。「私は天から下った生きるパンである。このパンを食べる者は永遠に生きる。」(ヨハネ6・51)

見よ、偉大な信仰の神秘。人々はキリストにパンを増やしてもらい、「十分に食べた」(ルカ9・17)のですが、キリストがご自分の肉を食べ、血を飲むという話をされると、その言葉を信じる事ができませんでした。だから後になって、キリストを十字架に付け

1 司教団は「教導職と司牧統 治職において、使徒団体を 相統し」「そのかしらであるロー マ教皇と共に、決してその頭なし にはなく、全教会の上に最高、 完全な権能を持つ。ただし、この 権能は、ローマ教皇が同意する時 だけしか行使できない。」(教会 憲章22番) 第二バチカン公会議 は、教会の伝統的な教えを要約し て、司教団の頭としてローマの司 教が遂行するペトロの役割につい て語っていますが、カトリックの 教えの中でも特に重要なこの点に ついて、今回は筋道立てて話して みましょう。イエズスがペトロに 命じたことと、特にフィリッポの カイザリア地方でのペトロの信仰 告白に対するイエズスの答えを考 えば、そこから出る責任とそれ

る結果となります。こうして全て が成し遂げられた時、最後の晩餐 の秘義が明らかになりました。「これはあなたたちのための私の 体である。この杯は私の血における 新しい契約である。」(エコーリ ント11・24、25) 「メルキセデク の位に等しい」祭司は高閣を出、 歴史の中でご自分の民と共に歩ま れます。これこそ主の御体の典礼 が表すこと、私たちが聖体をかか けてローマの市街を行きつつ宣言

2 そこでもう一度、マテオ福 音書本文とその場面のその 後の状況について考えてみます。 「人々は人の子をだれだと言っ ているのか」(マテオ16・13)と尋 ねた後、イエズスはさらに直接的 に質問されました。「ところで、 あなたたちは私をだれだと思っ ているのか」(マテオ16・15) そ こで、十二人を代表してシモンは 「あなたはキリスト、生ける神の 子です」(同16・13、16)と答え ます。この事実には大きな意味が 含まれていました。血の気が多 く、衝動的だったシモンは、自ら 十二人の代弁者の役割を演じたと も考えられます。しかしイエズス

したいと願っていることなのです。 めでたし、おとめマリアより生 れ給いしまことの御体よ。私たち の歩むこの道が、現代世界で教会 のたどる道々の、具体的なかたど りとなりますように。聖体に仕え るしもべたちの中のしもべローマ 司教は、北から南、日の昇る所か ら沈む所まで、この神秘を証する 現代の全ての人々に、心と精神に おいてついでに行きます。(六・十八)

3 「私は言う。あなたはペト ロである。」(マテオ16・ 18) この言葉はとても厳粛な響き をもち、師イエズスが意図される 拘束力と根本的な意味を伝えてい ます。「私は言う。」イエズスは みずから権威を持つ人のように話 されました。それは啓示、しかも 言われた事柄がそのまま実現する という、効果的な啓示なのです。

新しい使命の印として、新しい 名がシモンに与えられました。こ の名についてはマルコ(3・16) とルカ(6・14)が十二人の弟子 が選ばれる場面で明記しており、 イエズスがアラム語のケファを使 われたことをヨハネが記していま す。ケファはギリシャ語でペトロ と訳されます。(ヨハネ1・42)

4 イエズスがお使いになったアラ ム語のケファとそのギリシャ語訳 の「ペトラ」は「岩」を意味しま す。山上の説教の中で、イエズス は「岩の上に家をたてた賢い人」 (マテオ7・24)のたとえを示さ れます。イエズスはシモンが神か ら信仰の賜を受けているから、倒 れることのない建物の土台となる 岩のように堅固であると言われ、 教会という建物をその岩の上に建 てる計画を宣言されました。

このように違った観点から見 ることで、一つの基本的な関係に気 づきます。すなわちキリストはシ モンに新しい名を与えて、シモン・ペトロを土台である自らの能 力にあずからせたという結論が導 き出せます。キリストとペトロの 間のこのような基本的関係は、言 い得ぬ深い現実に根ざしており、 神の召命は特定の使命に具体化さ れてペトロに与えられたのです。

この出来事について記してい るただ一人の福音史家マテオは、自 分の福音書を読む共同体の人々に 対して、キリストの名においてペ トロのもとに「共に呼ばれた集ま り」という新しい概念を示したかっ たのでしよう。他方、イエズスが シモンに与えたペトロという「新 しい名」については他の福音史家 も証言しています。これはマテオ が記したのと同じ意味です。他の 意味は考えられません。(続く)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教 書簡、講話等を解説なしに そのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料別 一年予約九百円 送料七百円 下部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393